

養育者の内在的要因が子どもの愛着行動に与える影響

— 定型発達児と自閉症児の比較研究から —

神戸大学大学院総合人間科学研究科	山口 正 寛 ¹
神戸大学大学院人間発達環境学研究科	山 根 隆 宏
伊丹市立総合教育センター	花 村 香 葉
神戸少年鑑別所	鍋 島 宏 之 ²

The influence of parent's internalized factor for child's attachment behavior: The comparison study of normal toddlers and autistic toddlers.

Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University:

YAMAGUCHI, Masahiro

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University:

YAMANE, Takahiro

Itami Municipal Education Center:

HANAMURA, Kayo

Kobe Juvenile Classification Office:

NABESHIMA, Hiroyuki

要 約

本研究は、一般の幼児および自閉症児における養育者側の愛着体験や内在的要因と子どもの愛着との関連を比較検討することを通して、親子間の相互作用に影響を与えうるいくつかの要因について明らかにすることを目的とした。3~6歳の定型発達児141名と自閉症児36名の保護者を対象に、子どもの愛着行動、養育者自身の被養育体験、IWM、心理化能力、養育態度を問うアンケートを実施した。その結果、定型発達児と自閉症児の愛着行動は類似した傾向を示すものの、その頻度や強度は異なっており、定型発達児の方がより愛着行動を示す傾向にあることが示唆された。また、障害の有無と愛着の安定性によって、子どもの愛着行動における養育者自身のIWMと心理化能力に差は認められなかったが、養育者が支持的に関わるかどうか、また、養育者自身がどのように育てられてきたかに差が認められた。

【キー・ワード】愛着、自閉性障害、親子関係、養育者の内在的要因

¹ 現所属 東京成徳大学

² 現所属 大阪少年鑑別所

Abstract

The purpose of this study was to investigate the several factors to be related to parent-child interaction, such as parent's internalized factor, compared with mothers of autistic toddlers and developmentally normal children. Mothers having developmental normal children (3- to 6-years-old, N=141) and autistic toddlers (N=36) participated in a questionnaire survey: the child's attachment behavior, their parent's reared experience, internal working models(IWM), mentalization, and their parenting attitude were focus on this study. Results revealed that both children's attachment behavior of developmentally normal children and autism children indicate similar tendency, but developmentally normal children showed more attachment behavior than did autistic children. There was no significant difference in the mother's IWM and metalization, whereas significant difference in the mother's supportive parenting and parent's reared experience, between child's autistic factor (developmentally normal vs autistic) and children's attachment secure type (secure vs insecure).

【Key words】 attachment, autism disorder, parent-child relationship, internal factor of parents

問題と目的

近年では、幼児の愛着形成や親子関係に関する知見は豊富であり、愛着理論からは、そのような親子間の愛着形成や親子関係に影響を与える要因として、養育者側の内的作業モデル(internal working models; IWM)や心理化能力(mentalization)などが検討されている。

IWM は、早期養育体験における養育者との相互作用に基づいて形成される自他の表象であり、後の対人関係を規定していくとされる(Bowlby, 1988 二木訳 1993)。そして、いくつかの研究からは、養育者の IWM と子どもの愛着行動との間に有意な関連が示されている(e.g. Pederson, Gleason, Moran, & Bento, 1998; van IJzendoon, 1995)。また、心理化能力とは、自己や他者の心の状態について推測することをいい、養育行動における共感性の基盤となる能力である。Slade, Grienenberg, Bernbach, Levy, & Locker(2005)と Grienenberger, Kelly, & Slade(2005)は、養育者の心理化能力の高さが子どもの愛着の安定性と関連していることを明らかにし、実際の子どもへの養育態度が養育者の心理化能力に基づいて行われ、それらが子どもの愛着形成と関連していることを示唆している。山口(2009a)も養育者の被養育体験や IWM、共感性と子どもの愛着との関連に着目し、幼児の親子を対象に、養育者の被養育体験、IWM、共感性と子どもの愛着との関連を検討している。それによると、養育者の被養育体験のみが子どもの愛着と関連していることが明らかにされている。また、養育者の IWM と共感性は子どもの愛着と関連が示されなかったものの、これらの変数が子どもに対する直接的な養育態度または養育行動と関与している可能性があると考えしている。

以上の研究からは、次のようなことが示唆されていると言える。すなわち、養育者自身の経験してきた被養育体験が養育者の IWM や心理化能力を形成しており、こうした内在的要因が子どもとの関

わり方にも影響を与えることで、子どもの愛着形成や親子間の相互作用を規定していると考えられる。つまり、親子間の愛着形成や親子関係のあり方に対して、養育者自身の被養育体験やそこから形成される IWM と心理化能力などの内在的要因が重要な役割を果たしていると言える。

ここまでの先行研究は、先天的な障害を持たない一般的な幼児を対象とした研究であるが、近年になり、自閉性障害(以下、自閉症)のような発達的な問題を抱える子どもの親子間の愛着形成に焦点を当てた検討も行われつつある。例えば、Willemsen-Swinkels, Bakermans-Kranenburg, Buitelaar, van IJzendoorn, & van Engeland(2000)は、子どもの愛着の安定性は、自閉症特性よりもむしろ知的能力の影響が大きいことを示唆している。また、Rutgers, Bakermans-Kranenburg, van IJzendoorn, & van Berckelaer-Onnes(2004)は、自閉症児の愛着に関連する 10 の先行研究のメタ分析から、自閉症児の愛着の安定性に関連する要因は知的能力の低さと自閉症症状の重篤さであると結論づけている。

これら自閉症児の愛着研究ではいずれも、障害の深刻さ、知的レベルなどの子ども側の要因にもつばら焦点が当てられている。しかし、これらの研究は母親側の要因をほとんど考慮していないうえに、自閉症に由来する特有の行動形態が愛着の不安定性を示す行動と類似している(Capps, Sigman, & Mundy, 1994)ため、自閉症児を対象とした愛着研究では、親子関係や子どもの愛着を妥当に測定しているとは言えない場合がある。また、自閉症児を対象とした従来の愛着や親子関係の研究は、子どもの愛着の不安定性を子どもの障害特性に還元させる結果を示していると言えよう。それはおそらく、自閉症の特性として、出生当初から対人関係を結んでいくことに困難があるがゆえ、障害特性そのものが親子関係に与える影響が大きく、障害特性以外の要因を純粋に取り出すことが困難であることが考えられる。

しかし、現実には、自閉症児と養育者との関係においても一般幼児と養育者との関係と同様に多様な関係性が認められることは事実である。つまり、親子間の情緒的絆(affectional bonding)は障害の有無に関わらず認められ、養育者側の内在的要因が少なくとも関係性形成に関与していると考えられる。ところが、一般の幼児と障害を持つ子どもの親子間の相互作用に関する養育者側の種々の内在的要因の比較検討は現時点においてほとんど行われておらず、このような問題を明らかにすることは、親子が健全な関係性を結んでいくプロセスを明らかにする上で、学術的にも臨床的にも意義のあることと思われる。

以上のことから、本研究では、一般の幼児および自閉症児における養育者側の愛着体験や内在的要因と子どもの愛着との関連を比較検討することを通して、親子間の相互作用に影響を与えうるいくつかの要因について明らかにすることを目的とする。

方 法

1) 調査手続き 調査は、A 県内にある幼稚園 3 園および、自閉症児の親の会と通所療育施設で行われた。本調査の実施については、保護者に向けた本研究についての目的を書面にて説明し、本研究への参加は完全に任意であることを示した上で、同意した保護者にのみ実施した。質問紙への参加は、

幼稚園および療育施設から保護者に配布し、厳封にて回収した。また、自閉症児親の会に関しては、郵送にて配布・回収した。回収にあたっては、プライバシーは保護されること、研究調査以外の目的で回答内容が利用されないことがないこと、調査に協力をしてもらえない場合でもいかなる不利益を被ることはない旨を紙面上に明記した。なお、調査時期は保護者と幼児ともに2009年10月～2009年12月であった。

2) 調査対象者 幼稚園3園に質問紙を配布した結果、141名の回答が得られた(回収率=63%)。欠損値の多い回答を除き最終的な有効回答者数は135名であった。保護者の平均年齢は35.5歳($SD=4.25$)であり、回答者の内訳は、母親134名、父親1名であった。また、子どもの平均月齢は68.8ヶ月($SD=7.07$)であり、性別の内訳は、男児67名(49.6%)、女児67名(49.6%)であった。これらの幼稚園から得られた結果を、以後、定型発達児群とする。

自閉症児親の会および通所療育施設での質問紙配布の結果、36名の回答が得られた(回収率=60%)。本研究の対象とする自閉症の診断を受けている親に限定したところ、最終的に有効回答者は23名であった(自閉症児親の会:11名、通所療育施設:12名)。親の平均年齢は39.9歳($SD=5.63$)であり、回答者の内訳は全員が母親であった。また、子どもの平均月齢は97.9カ月($SD=42.1$)であり、性別の内訳は、男児18名(78.3%)、女児4名(17.4%)であった。以上の自閉症児親の会および通所療育施設から得られた結果を、以後、自閉症児群とする。

3) 質問項目 質問項目は、(a)愛着行動尺度、(b)日本語版 Parental Bonding Instrument (PBI) (小川, 1991; Parker, Tupling, & Brown, 1979)、(c)ECR-GO(中尾・加藤, 2004)、(d)Empathy Questionnaire(EQ) (Baron-Cohen & Wheelwright, 2004; 若林・バロン・コーエン・ウィールライト, 2006)、(e)Caregiving Questionnaire(CGQ)(Kunce & Shaver, 1994)を使用した。

(a) 愛着行動尺度

子どもの養育者に対する愛着行動をQソート法によって分類するアタッチメントQソート法(Waters & Deane, 1985)の各項目をクラスター分析によって分類したHowes & Smith(1995)による項目および、近藤(2008)によるアタッチメントQソート法の対訳を参考にし、子どもの愛着を測定するための愛着行動尺度を作成した。この尺度では、Howes & Smith(1995)によるクラスタ分析の結果と同様に5つの下位尺度から構成された。すなわち、新奇状況や不安が喚起されるような場面で母親を探索のための安全基地として利用することを示す“secure base”(5項目)、母親や他者との情緒的交流の回避傾向を示す“avoidance”(8項目)、母親との身体接触を伴うやりとり心地よさを感じることを示す“seeks comfort”(6項目)、母親の指示に素直に応じる傾向を示す“positive negotiation”(4項目)、短気さや我慢のきかなさを示す“difficult negotiation”(3項目)である。それぞれの項目は4件法で実施され、各下位尺度の得点が高いほど、その下位尺度が示す特徴を強く示していることになる。

(b) PBI(小川, 1991; Parker, et al., 1979)

子どもからみた養育者の養育態度についての自覚的評価スケールである。本研究でも、養育者自身

の被養育体験を測定するために使用した。

Parker et al. (1979) は、子どもからみた養育者の養育態度は、「養護」と「過保護」の2因子にまとまるとし、PBIを「養護」が12項目、「過保護」が13項目の計25項目で構成している。PBIにおいては、「養護」得点が高いほど、ケア傾向が高く(無関心や拒否の傾向が低い)、「過保護」得点が高いほど過保護傾向が高い(自立を促す傾向が低い)ことになる。PBIは、小川(1991)によって日本語版PBIが作成されており、その妥当性と信頼性が確認されている。したがって、本研究では、小川(1991)によるPBI日本語版を用い、母親と父親の両方に対して25項目を4件法で実施した。

(c) ECR-GO(中尾・加藤, 2004)

養育者のIWMを測定するために実施した。本尺度はIWMの他者モデルを反映する「親密性回避」と自己モデルを反映する「見捨てられ不安」の下位尺度で構成されている。それぞれの下位尺度は18項目、計36項目から構成され、7件法で実施した。なお、下位尺度得点が高いほど、「親密性回避」傾向または「見捨てられ不安」傾向が高くなる。

(d) EQ(Baron-Cohen & Wheelwright, 2004; 若林他, 2006)

養育者の心理化能力を測定するために、EQを使用した。EQは、心理化能力に関わる「心の理論」や他者の信念理解に基づく共感性を測定するものである。養育者が子どもに対して適切に応答するためには、他者の信念を適切に推測する共感性が必要であり、こうした共感性は養育者の心理化能力を反映していると考えられることから、本尺度を使用することが適当と判断した。なお、本尺度の得点が高いほど、他者に対する共感性が高いことになる。合計21項目、4件法で実施された。

(e) Caregiving Questionnaire (CGQ) (Kunce & Shaver, 1994; 山口, 2009b)

子どもに対する自分の養育態度をどう評価しているかを測定するために、本尺度を使用した。CGQは、愛着理論に基づき、成人期における親密な相手(パートナー)への特有なケアギビングの側面を測定するために開発された尺度である。各下位尺度は、愛着対象が愛着欲求を示した時に、自身が愛着対象に対して物理的・心理的に接近を求めると示す「接近 対 回避 (proximity / distance)」(以下、「接近」とする)、愛着対象が問題解決に際して困難な状況に立たされた時に、支持的かつ協力的に問題解決をサポートする傾向を示す「協力 対 制御 (cooperation / controlling)」(以下、「協力」とする)、愛着対象が表明する愛着欲求を適切かつ敏感に察知する傾向を示す「感受性 対 非感受性 (sensitivity / insensitivity)」(以下、「感受性」とする)、愛着対象のニーズに合わないケアをする傾向を反映する「強迫的世話 (compulsive caregiving)」の4つの下位尺度が設定され、全て8項目、計32項目で構成されている。

なお、本研究では、山口(2009b)が、養育者が自身の子どもに対する態度を評定できるよう、文中の「パートナー」を「子ども」に翻訳・修正したものを使用した。6件法で実施され、それぞれの下位尺度得点が高いほど、その因子名の傾向が高いことになる。

ただし、自閉症児親の会で調査協力を得た回答者については、小学生年齢の児童の保護者であったため、全ての質問に回答するにあたって、幼稚園の頃(3~6歳頃)の子どもと自身の事を思い浮かべながら回答するよう求めた。

結果と考察

1) 各尺度の記述統計

各尺度の記述統計を算出したものを表1に示す。いくつかの尺度では α 係数がやや低かったものの、すべての下位尺度は $\alpha=.60$ 以上であり、各尺度の内的整合性はある程度保たれているものと判断した。したがって、以下の分析では、信頼性分析の結果残存した項目群を用いることとする。

表1 各尺度の記述統計

	<i>M (SD)</i>	<i>α</i>
愛着行動尺度		
secure base	13.74 (2.80)	.64
avoidance	15.79 (2.90)	.61 ^{*2}
seeks comfort	18.12 (3.08)	.72
positive negotiation	12.05 (2.30)	.71
difficult negotiation	6.85 (2.05)	.69
CGQ		
近接維持	29.38 (4.42)	.80 ^{*2}
敏感性	30.08 (4.23)	.80 ^{*1}
協力	31.99 (4.88)	.74
強迫的世話	17.64 (4.55)	.73 ^{*2}
ECR-GO		
親密性回避	62.20 (15.55)	.88
見捨てられ不安	56.29 (18.98)	.93
PBI		
母養護	25.04 (8.58)	.95
母過保護	14.47 (4.48)	.83 ^{*3}
父養護	22.04 (8.94)	.94
父過保護	13.46 (4.14)	.79 ^{*3}
EQ	58.36 (8.24)	.90

^{*1} 1項目削除したとき α 係数が最大となっている。

^{*2} 2項目削除したとき α 係数が最大となっている。

^{*3} 3項目削除したとき α 係数が最大となっている。

2) 愛着行動の分類

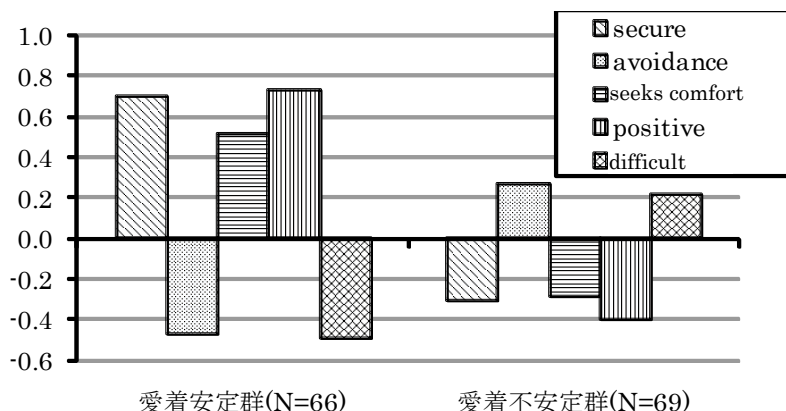


図1 定型発達児群の愛着行動尺度におけるクラスタ分析結果

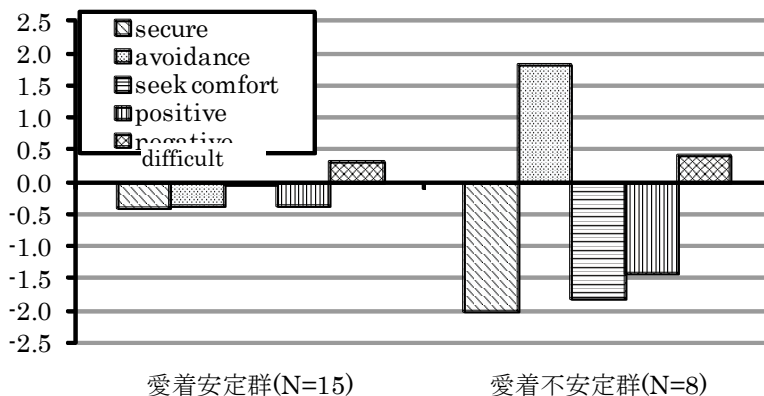


図2 自閉症児群の愛着行動尺度におけるクラスタ分析結果

子どもの愛着の安定性と不安定性を分類するため、愛着行動尺度の各下位尺度得点を標準化し、定型発達児群および自閉症児群のそれぞれにクラスタ分析 (*k-means* 法) を行った。その結果、両群ともに解釈可能であった 2 つのクラスタを採用した(図 1, 図 2)。次に、定型発達児群および自閉症児群ごとに、得られた 2 つのクラスタ間の愛着行動尺度の下位尺度得点の差を検討するために *t* 検定をおこなった。その結果、定型発達児群では愛着行動尺度のすべての下位尺度得点に有意な群間差が認められ (secure base $t(133)=9.57, p<.001$; avoidance $t(133)=5.31, p<.001$; seeks comfort $t(116.098)=5.86, p<.001$; positive negotiation $t(126.745)=9.75, p<.001$; difficult negotiation $t(133)=4.50, p<.001$)、自閉症児群では difficult negotiation を除いた下位尺度得点に有意な群間差が認められた (secure base $t(21)=4.52, p<.001$; avoidance $t(21)=5.84, p<.001$; seeks comfort $t(21)=4.68, p<.001$; positive negotiation $t(21)=2.10, p<.05$; difficult negotiation $t(21)=0.27, p=n.s.$)。定型発達児群では、secure base, seeks comfort, positive negotiation が有意に高いクラスタを「愛着安定群」とし、avoidance と difficult negotiation が有意に高いクラスタを「愛着不安定

群」とした。自閉症児群では, *secure base*, *seeks comfort*, *positive negotiation* が有意に高いクラスタを「愛着安定群」とし, *avoidance* が有意に高いクラスタを「愛着不安定群」とした。以上の結果から, 定型発達児でも自閉症児でも養育者に対してある程度類似した愛着行動を示すと考えられる。

3) 定型発達児群と自閉症児群における愛着行動の比較

表2 定型発達児群および自閉症児群のクラスタ分析結果による愛着行動尺度の平均値と標準偏差

	定型発達児群		自閉症児群		F 値
	安定群 (N=66)	不安定群 (N=69)	安定群 (N=15)	不安定群 (N=8)	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
<i>secure base</i>	15.75 (2.01) ^a	12.83 (1.51) ^b	12.53 (2.56) ^b	7.88 (1.89) ^c	59.56 ^{***}
<i>avoidance</i>	14.40 (2.49) ^c	16.59 (2.30) ^{ba'}	14.73 (2.71) ^{b'}	21.25 (2.19) ^{aa'}	24.34 ^{***}
<i>seeks comfort</i>	19.72 (1.95) ^a	17.14 (3.07) ^b	18.00 (2.59) ^b	12.25 (3.20) ^c	24.89 ^{***}
<i>positive negotiation</i>	13.77 (1.35) ^a	11.13 (1.78) ^b	11.20 (2.48) ^b	8.82 (2.76) ^c	37.68 ^{***}
<i>difficult negotiation</i>	5.88 (1.83) ^b	7.35 (1.97) ^a	7.53 (1.73) ^a	7.75 (2.05) ^a	8.58 ^{***}

a, b, cおよびa', b', c'は多重比較によりa>b>c, a'>b'>c'の差がみられたことを示す。
***p<.001, **p<.01, *p<.05

次に, 定型発達児群および自閉症児群ごとに得られた4つのクラスタを独立変数に, 愛着行動尺度の下位尺度得点を従属変数とした一元配置の分散分析をおこなった(表2)。その結果, 愛着行動尺度のすべての下位尺度得点に0.1%水準の有意差が認められた。そのため, 多重比較(LSD法)をおこなったところ, *secure base* では定型安定群>定型不安定群, 自閉安定群>自閉不安定群であった。*avoidance* では自閉不安定群>定型不安定群>定型安定群ならびに自閉不安定群および定型不安定群>自閉安定群であった。*seeks comfort* では定型安定群>定型不安定群および自閉安定群>自閉不安定群であった。*positive negotiation* では定型安定群>定型不安定群および自閉安定群>自閉不安定群であった。*difficult negotiation* では定型安定群がその他の群と比べて有意に得点が高かった。

この結果は, 定型発達児と自閉症児はともに類似した愛着行動を示すものの, その頻度や強度には相違が見られ, 定型発達児の方がより愛着行動を示しやすいことを示唆している。すなわち, このような傾向が見られるのには, 自閉症そのものが持つ障害の行動特徴に由来するものと考えられる(Capps, et al., 1994)。

4) 定型発達児群および自閉症児群の愛着の安定性による養育者の内在的要因の差

子どもの障害の有無と愛着行動による養育者の内在的要因の差を検討するため, 定型発達児群および自閉症児群の愛着の安定・不安定(定型安定群, 定型不安定群, 自閉安定群, 自閉不安定群)の4群を独立変数として, CGQ, ECR-GO, PBI, EQのそれぞれの下位尺度について一元配置の分散分析をおこなった。その結果, 「近接維持」($F(3,154)=3.83, p<.001$), 「協力」($F(3,154)=5.10, p<.01$), 「母養護」($F(3,154)=3.38, p<.05$), 「父養護」($F(3,195)=23.4, p<.05$)において有意な群間差が見られた(表3)。多重比較(LSD法)を行ったところ, CGQの下位尺度である「近接維持」は定型安定群

が定型不安定群に比べて有意に得点が高く、「協力」は定型安定群が定型不安定群と自閉不安定群に比べて有意に得点が高かった。また、PBIの下位尺度である「母養護」と「父養護」に群間差が認められ、「母養護」は定型安定群が自閉症児群の2群よりも有意に得点が高く、「父養護」は定型安定群が他の3群よりも有意に得点が高かった。

表3 障害の有無と愛着の安定性における各尺度の一元配置分散分析(LSD)の結果

	定型発達児群		自閉症児群		F 値
	愛着安定	愛着不安定	愛着安定	愛着不安定	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
CGQ					
近接維持	30.53 (4.08) ^a	28.47 (4.82) ^b	30.47 (4.14) ^{a'}	26.38 (5.78) ^{bb'}	3.83 *
敏感性	28.15 (4.97)	26.10 (4.14)	28.00 (5.08)	26.75 (3.99)	2.43
協力	33.48 (4.86) ^a	31.01 (4.50) ^b	32.56 (4.69) ^{a'}	28.13 (5.03) ^{bb'}	5.10 **
強迫的世話	16.81 (3.84)	17.71 (4.58)	18.33 (4.47)	21.00 (6.07)	2.49
ECR-GO					
親密性回避	59.87 (14.48)	63.55 (16.89)	62.07 (16.12)	66.75 (16.68)	0.86
見捨てられ不安	55.44 (20.15)	55.73 (18.22)	55.70 (20.09)	54.25 (20.97)	0.02
PBI					
母養護	26.88 (8.02) ^a	25.27 (7.39)	21.20 (12.00) ^b	19.63 (7.19) ^b	3.38 *
母過保護	13.53 (4.44)	14.82 (4.38)	15.45 (5.25)	13.25 (4.65)	2.20
父養護	24.84 (7.69) ^a	21.51 (9.36) ^b	19.53 (8.77) ^b	17.63 (7.82) ^b	3.41 *
父過保護	12.82 (3.64)	13.67 (4.37)	14.00 (5.28)	13.00 (3.85)	1.38
EQ	59.22 (7.93)	57.74 (6.06)	61.33 (12.92)	55.25 (14.38)	1.38

a, bおよびa', b'は多重比較によりa>b, a'>b'の差がみられたことを示す。

***p<.001, **p<.01, *p<.05

以上の結果は、定型発達児でも自閉症児でも、愛着が安定している子どもの方が養育者は「近接維持」を求めたり、「協力」的な態度で接する傾向にあると言える。また、定型発達児と自閉症児では、養育者自身が体験してきた被養育体験にも差があることを示唆しており、定型発達児における愛着安定群の子どもの母親は自閉症児の母親よりも、自身の両親から「養護」的に育てられたと捉える傾向にあると言える。

しかしながら、障害の有無と愛着の安定性に対して、養育者自身のIWMや心理化能力には差が認められなかった。このことから、養育者が自身の養育体験の中で形成してきた対人関係の取り方や他者の心的状態を推測する能力は、子どもの障害の有無や愛着の安定性に対して十分な影響力を持っているわけではないと言える。この結果は、先行研究(e.g. Grienberger et al., 2005; Pederson et al., 1998; Slade et al., 2005; van IJzendoorn, 1995 study1)とは異なっている。先行研究と本研究の結果の相違は、愛着関連変数の測定法や子どもの対象年齢の相違などによる影響も考えられるが、山口(2009b)によると、養育者のIWMや心理化能力は養育態度と関連するが、子どもの愛着形成とは間接的にしか関連していないことを報告している。本研究においても、子どもの障害や愛着の安定性に対して養育態度に差が認められたことから、養育者自身のIWMや心理化能力が養育態度に対して影

響力を持っている可能性も考えられるが、この点についてはこれらの変数同士の影響力を検討する必要がある。したがって、養育者の内在的要因における異なる変数の因果的プロセスについて明らかにすることが今後の検討課題であろう。

まとめと今後の展望

本研究では、一般の幼児および自閉児における養育者側の愛着体験や内在的要因と子どもの愛着行動との関連について比較検討してきた。以上の本研究の結果から、子どもが自閉症であるかどうかということと愛着の安定性において、養育者が支持的に関わるかどうか、また、養育者自身がどのように育てられてきたかには差があることが示唆された。

本研究では子どもの障害の有無や愛着の安定性に対する養育者の内在的変数の特徴を比較検討したが、これらの検討は養育者がどのように育てられ、子どもに関わるかということが直接的に子どもの愛着に影響を与えるとする因果関係を検討したものではない。したがって、養育者の内在的要因が子どもの愛着形成に対して直接的に影響を与えているという結論を導くことは控える必要がある。

また、本研究では、自閉症群の調査対象者数が少ない上に、一部回想に基づく回答を求めている。したがって、因果関係を含む正確かつ詳細な結論を導くためには、より多くのサンプル数を増やすだけでなく、縦断的な検討や知的レベルを統制した検討などが求められるため、今後は、これらの点を検討課題としたい。

引用文献

- Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S. (2004). The Empathy quotient: An investigation of adults with Asperger syndrome or high functioning autism, and normal sex differences. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **34**, 163-175.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Clinical applications of attachment theory*. London: Routledge.
(ボウルビィ, J. 二木武(訳) (1993). 母と子のアタッチメント: 心の安全基地 医歯薬出版)
- Capps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994). Attachment security in children with autism. *Development and Psychopathology*, **6**, 249-261.
- Grienenberger, J. F., Kelly, K., & Slade, A. (2005). Maternal reflective functioning, mother-infant affective communication, and infant attachment: exploring the link between mental states and observed caregiving behavior in the intergenerational transmission of attachment. *Attachment & human development*, **7**, 299-311.
- Howes, C., & Smith, E. W. (1995). Children and their child care caregivers: Profiles of relationships. *Social Development*, **4**, 44-61.
- 近藤清美 (2008). 私信.
- Kunce, L. J., & Shaver, P. R. (1994). An attachment-theoretical approach to caregiving in

- romantic relationships. In K. Bartholomew, & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationship: Vol. 5. Attachment process in adulthood*. London: Kingsley. pp.205-237.
- 中尾達馬・加藤和生.(2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-24.
- 小川雅美 (1991). PBI 日本語版の信頼性,妥当性に関する研究 精神科治療学, **6**, 1193-1201.
- Pederson, D. R., Gleason, K. E., Moran, G., & Bento, S. (1998). Maternal attachment representations, maternal sensitivity, and the infant-mother attachment relationship. *Developmental Psychology*, **34**, 925-933.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- Rutgers, A. H., Bakermans-Kranenburg, M. J., van IJzendoorn, M. H., & van Berckelaer-Onnes, I. A. (2004). Autism and attachment: meta-analytic review. *Journal of Child psychology and Psychiatry*, **45**, 1123-1134.
- Slade, A., Grienenberger, J., Bernbach, E., Levy, D., & Locker, A. (2005). Maternal reflective functioning, attachment, and the transmission gap: A preliminary study. *Attachment & human development*, **7**, 283-298.
- van IJzendoorn, M. H. (1995). Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, **117**, 387-403.
- 若林明雄・サイモン バロン・コーエン・サリー ウィールライト (2006). Empathizing-Systemizing モデルによる性差の検討—Empathizing 指数(EQ)と Systemizing 指数(SQ)による個人差の測定—心理学研究, **77**, 271-277.
- Waters, E. & Deane, K. E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachmentrelationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research: Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**(Serial No. 209), 41-65.
- Willemsen-Swinkels, S. H. N., Bakermans-Kranenburg, M. J., Buitelaar, J. K., van IJzendoorn, M. H., & van Engeland, H. (2000). Insecure and disorganized attachment in children with a pervasive developmental disorder: Relationship with social interaction and heart rate. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **41**, 759-767.
- 山口正寛 (2009a). 養育者の愛着と子どもの愛着との関連—愛着の世代間伝達という観点からの検討 — 日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集, 384.
- 山口正寛 (2009b). 愛着表象の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科未公開博士論文.

謝 辞

本研究にご協力頂いた関係機関および子どもたちの保護者の皆様には深く感謝申し上げます。また、多忙の中、調査に至るまでにご尽力頂いた神戸大学大学院医学系研究科准教授の田中究先生と、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授の中林稔堯先生には心より御礼申し上げます。